

母性看護の先生はお母さん

山口県立大学看護学部助教授

斉藤 ひさ子

イメージしにくい母性という言葉

母性という言葉 あくまで抽象のものとしてある 二十歳の五月 俵万智

高校を卒業して入学してきたばかりの看護学生を前にして、いつも頭を悩ますのは、母性をいかにわかりやすく理解してもらうかです。学生の多くは入学前にボランティアや1日看護体験などを通して、病気の成人や老人、子どもと接した経験を持っています。ところが妊娠や出産というできごとを、自分の日常生活のなかで経験したことのある学生は非常に少ないのです。これから自分や兄弟姉妹、友人などの体験を通して具体化していくのでしょうか。

従って実習に行く前の学生にとって、母性看護学で学ぶことはイメージしにくく、机上の学習になりがちです。そこでさまざまな工夫をしながら母性への興味や関心を引き出し、その中で看護することの楽しさやおもしろさ、きびしさを伝えていけたらと考えています。それには視聴覚教材やシュミレーターを用いた学習も有効です。

しかし学生にとって最もいい教師・教科書は自分たちのお母さんであり、妊娠・出産・育児の経過が記録されている母子健康手帳ではないかと思います。

母子健康手帳は愛の宝庫

母子健康手帳は子どもが小学校に入学すると使用する機会が少なくなってしまうますが、お母さんは大切に保管しているものです。看護を学ぶ学

生にとって、そこに記載された事項はまさに知識の宝庫です。

これまでも教材として母子健康手帳を購入させて使用していましたが、空白の手帳はあまり看護学生の興味を引くものではありませんでした。そこでレポートの課題の1つとして取り上げてみました。すると全体の6割の学生が「あなたの母子健康手帳を読んで気づいたことを述べなさい」というテーマを選んでおり、レポートの内容も画一的ではなく、各学生の新鮮な気づきが述べられており急激な関心の変化に驚かされました。

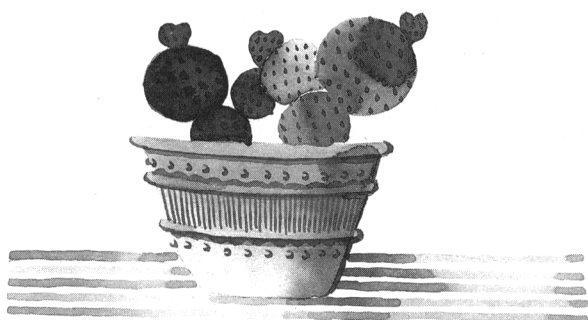
「妊娠6週に心音が(+)になっていた。私は赤ちゃんとして生まれてきたのだな。本当にお母さんのお腹のなかで小さな命を生きていたのだなと思いました」

「妊娠するとお腹が大きくなるのだと単純に思っていました。子宮底が高くなるということを知りました。また腹囲は20cm、体重はなんと13kgも増えていました。塩分の摂り過ぎに注意するよう書かれていました。お腹に私がいたことで、それまで健康だった母に影響を与えていたことがわかりました」

「勉強したりするのがあまり好きではないお母さんが母親学級を受講していました。驚きとうれしさを感じました」

「母は自分より背も低く小柄で、こんな小さな人が自分を産むために24時間もの間、陣痛をがまんしていたと思うとすごいなと思った」

「私はよく熱を出したらしく、いつどんな様子で、解熱剤のなにをどのくらい飲ませたかまで書



いてあった。初潮のことも書いてありました。記録が残っているのはとても大切にしてくれた証拠です」

これらの学生の記述の中には、妊婦貧血、妊娠中毒症、双胎、骨盤位、双角子宮、微弱陣痛、早期破水、陣痛促進剤の投与、第1度仮死、蘇生術、酸素吸入、癒着胎盤、胎盤用手剥離、弛緩出血、大量輸血、帝王切開、鉗子分娩、吸引分娩、重症黄疸、光線療法、新生児メレナ……など、まさに教科書どおりのさまざまな症状や経過があげられていました。初学者である学生にとってこれらの異常を知ることでもなにか悪い影響がないだろうかと危惧した面もありましたが、杞憂でした。学生は正常・異常の記述にとらわれず、自分の母親が子どもの命を育み、愛しみ、産みだしたことを正面から受け止め、お母さんの貴重な努力が困難を乗り越えさせたのだということを十分理解できていました。この理解を進めたものは、レポートを契機にしてもった、お母さんやお父さんとの会話だったようです。

伝えよう！親と子のきずな

日本人は普段、親子の間でお互いを大切に思っているとか、愛しているとかを率直に口にだすことは少なくむしろ苦手です。しかしお互いのきずなを再確認する作業は人生のどこかで必要です。自分が生まれた状況を学生が尋ねたことから、お母さんたちは妊娠・出産・育児にまつわるエピソードと共に、子どもへ注いだ愛情を伝えられたように思います。

「私は逆子でそれをなおすために母は体操をしていたそうです。その体操は苦しくて、なおったと思うとまたすぐに元にもどってしまい、母は泣きながらやったそうです」

「私はやせていて体が安定しなかったので、耳の後ろに綿をおいて安定させたそうです。親は自分の子どもを育てるのに必死になって、いろいろな工夫をしたりするのがわかりました」

この親と子のきずなを理解できることが、母性看護に携わる際のとても大切な第一歩になります。またお母さんがこのきずなを良好に保て、幸せな経験として子どもに伝えていくためには、母性看護に携わる者の最良の援助が必要です。母性看護教育はまさに世代をめぐる連関に支えられているといえそうです。母性看護教育の充実の必要性をあらためて実感しました。

なかにはこんな感想もありました。「医療機関で行なわれた記録の字が雑で、読むのに困難なところさえあります。大切な健康の記録となるのですから、忙しいかもしれませんが、もう少し丁寧に記入してほしいと思いました」耳が痛い意見です。20年後、私たちが記載した母子健康手帳を手にした子どもたちが、このような思いを抱かないよう、助産婦の愛情を込めて母子健康手帳を記載していきたいものです。

前号の羽田野扶沙子さんとは助産婦学校の同級生ですが、あまり真面目でなかった私が教員になってしまったのでとても心配したようです。そこで今回は私の教え子を紹介したいと思います。北九州市で開業した岡本雅弥さんにバトンを渡します。